

言語習得過程についての人間関係学的研究 (言語・発達臨床論) I

佐々加代子

序

現代社会の高度な物質文明は、生活のさまざまな面に便利さをもたらしてきたが、一方では、人間同志のかかわりあいから学びとる事柄を失わさせてきた。若者たちの「ことば使い」²³⁾に見受けられる現象はその代表例であろう。

言語を「人間がその思ったことや感じたことを社会的、習慣的に認められている記号を用いて伝えあう能力、またはその機能である」⁸⁾ととらえて、社会における「ことば」の使われ方をながめてみると、言語が正常に機能していない状態が見出せる。見かけの言語¹⁷⁾の問題や言語発達遅滞児の問題などである。筆者はこれらの問題を、出生時からの子育てのあり方に起因すると考え、1)子どもの成長のプロセスについての考え方の提示¹²⁾、2)保育者の役割と機能の指摘、3)人間関係の媒介役としての距離——信号行動系¹⁴⁾とその特徴²²⁾、4)言語発達過程をコミュニケーション(人間関係)過程論²²⁾、でおさえることから言語の歪みの解明を意図して研究・実践^{12)~22)}を重ねてきた。

1990年~1992年までの3年間の本研究期間内に、新生児期(0:0)から6年間の言語習得過程について、さまざまな子どもたち^{26)~28), 33)}の縦断研究成果²¹⁾をふまえた上で、1)言語習得と人間関係の関連性、2)そのメカニズムの解明、3)言語・発達助成者としての保育者のかかわり方(技法として出すこと)、4)発達の歪みを見出すチェックリストの作製にあり、さらに、5)佐々の言語・発達臨床論の有効性と妥当性の検討を意図している。

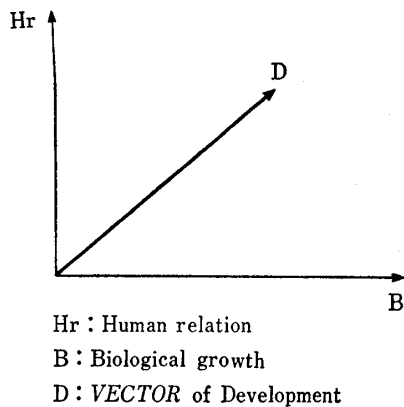
本論文では、言語発達の基盤となるコミュニケーション過程の基本原型学習過程が活発になる、人間(母子)関係成立段階、第Ⅲ期、共有体験期までの検討とする。

I. 言語・発達臨床仮説

1. 発達についての見方

筆者は、子どもとかかわる人としてのあり方を児童学⁷⁾においている。私と出会うどのような子どもたちや人たちについても、「今、ここで、出会えている」ことが出発点であり、あるがままの姿を受けとめてかかわっていく、ということである。かかわる相手に成長の変化を期待するとき、変われるのはまずは自分の側から、として、自分自身の見方や

この研究は、1989年度白梅学園短期大学研究助成金、及び平成2年度文部省科学研究補助金一般研究(C)萌芽的研究(課題番号02808017)の一部によるものである。ここに感謝申し上げます。



図Ⅰ 子どもの成長のプロセス
(佐々, 1983)

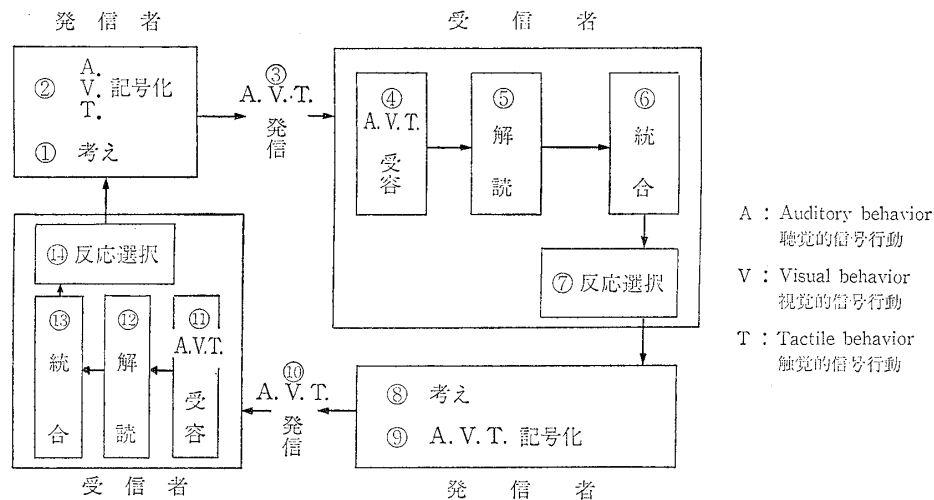
かわり方を模索して実践していくというものである。その上で、人間の成長のプロセスについて図Ⅰのように考えた。横軸を、ヒト固有の生物学的発育・発達の原因、Biological growth (B) とし、もう一方の縦軸を、子どもと母親との関係、及び子どもとかわる人たちを全体としてまとめて人間関係の要因、Human Relation (Hr) とし、発達はそのベクトルで示すことができる、ということである。人間関係は母子関係だけではなく、さまざまな要素をもつ変量としてとらえられること、同様に、生物学的要素も変量としてとらえられるので、発育・発達は Hr 及び B の強弱や質的な変化によって方向や量が変化する。とり

わけ Hr はこの小論の課題とするところである。

2. コミュニケーション (人間関係) 過程

コミュニケーションの代表的なものに「ことば」がある。ことばによるやりとりは、よくキャッチボール²²⁾にたとえられている。日常のコミュニケーション過程 (人間関係) は基本的にはキャッチボールに代表されるように、一対一の個人間コミュニケーションである。キャッチボールをする相手の力量をみきわめた上で、距離を定め、相手に向かって (方向)、強さやスピードを考えて、確実に、受けとりやすいボールを投げることにある。受けとり方を見ながら自分のボールの内容と受けとり方の力量を判断する。相手からはどのようなボールでも良い受け手 (キャッチャー) となることでやりとりのおもしろさを感じてもらようにする。良いピッチャーと良いキャッチャーになることが、キャッチボールの楽しさやおもしろさの体験とつながっていく。

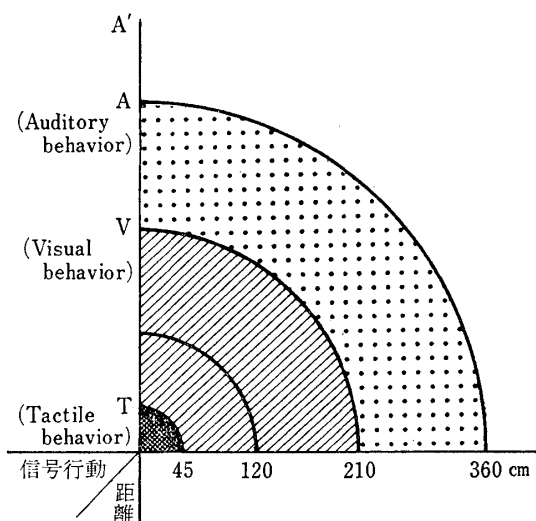
コミュニケーション過程におけるボールとは、媒介となるもので、佐々は三種類の信号行動系 (Tactile behavior, Visual behavior, Auditory behavior) とした。人間関係の一定の解析の資料とみなすことができるもので、VC (Verbal Communication 言語行動)



図Ⅱ コミュニケーションの基本的過程 (佐々, 1989)

と NVC (Non Verbal Communication 非言語行動) の考え方にもう一步ふみ入れて考える見方である。人間関係の展開過程を成人言語をもつ人として表わしたのが図Ⅱである。発信者・受信者が乳幼児の場合は、①、⑧の考え及び②、⑨の記号化過程が未熟であり、さらに④～⑦及び⑪～⑭までの過程は未熟である。言語習得過程のどの時期にそれぞれの段階が習得されていくのか、ということも本研究の目指すところとなる。

人間関係の展開において重要な要素をもつ、距離との関係を図Ⅲで示した。両者が原点にあること(距離ゼロ)は、両者において三種類の信号行動系を受信・発信できるということを意味している。ヒト本来の子育て(連れ歩き型²⁸⁾)は、この図の示す原点に両者が居る、ということである。子どものサインが弱い場合でも、触覚的信号行動系が両者の交信の手がかりになる、ということを示している。



図Ⅲ 信号行動系と空間距離(佐々, 1985)

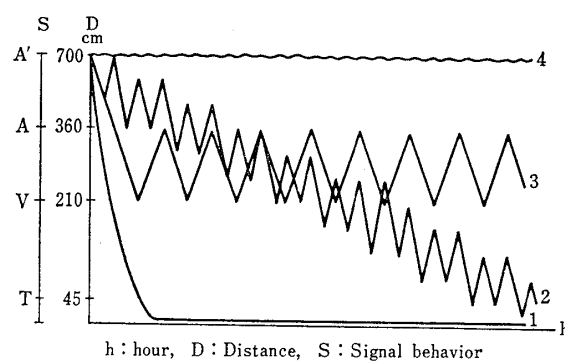
3. 言語発達過程

人間の成長のプロセスの一面が言語発達である。言語発達も生物学的要因(B)と人間関係(Hr)のベクトルで考える。言語発達に関する生物学的要因としては、脳、発声・発語器官、及び聴覚、視覚、触覚の知覚能力である。

言語発達(0～6歳まで)を三期に分けて考える。即ち、1)コミュニケーション関係成立期(0～1歳)、2)話しことばの確立期(1～3歳)、3)国語学習基盤の形成期(3～6歳)である。1)コミュニケーション関係成立期は母子関係の成立段階(表Ⅰ)と対応する。

遅滞児の言語発達については、臨床者として、その子どもとの人間関係をさぐる(図Ⅳ)からはじめて、間柄を育むこと(接近誘導法——V信号行動系によるコミュニケーション過程)、そして人間関係の間柄の質を求めていく。さらに、子どもの身近な人である、母親を中心とした人間関係に対してかかわり方の質的転換への助言をする。また、頭部外傷、脳血栓などで失語症になった人たちに対しても、その時点からコミュニケーションの手がかりを求める。その人の人間関係のひとりとして位置づけて考え、その後は発達遅滞児のかかわり方に準じて行なう。人間関係の間柄の質の評価は、表Ⅰの段階と対応する。

どのような子どもや人たちでも、言語習得過程の第一期を人間(母子)関係の成立段階とするものである。その成長過



h: hour, D: Distance, S: Signal behavior
1. 密接型, 2. 漸接型, 3. 振幅型, 4. 遠方定置型

図Ⅳ 接近過程の類型(佐々, 1985)

表Ⅰ 母子関係の成立段階にみる未言語*交信過程と特徴 (佐々, 1985)

段 階	母子関係の成立段階	未言語の交信過程	未 言 語 の 特 徴	距離のゾーン
第Ⅰ期	模 索 期	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div>子ども Ⓒ</div> <div style="text-align: center;"> \longleftrightarrow </div> <div>母親 Ⓜ</div> </div>	偶発的発信 母親が未言語を受けとめて誘導される。母親の意味づけによる接近, 接触過程により交信の成立。未言語は両者における交信過程学習の契機となる。	A (V) (T)
第Ⅱ期	接触体験期	<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div>子ども Ⓒ</div> <div style="text-align: center;"> \longleftrightarrow </div> <div>母親 Ⓜ</div> </div> <p>または</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div>母親 Ⓜ</div> <div style="text-align: center;"> \longleftrightarrow </div> <div>子ども Ⓒ</div> </div>	意図的発信, 及び, 受信における機能の理解。 交信過程の基本原型の理解, 学習過程。 密接距離(Tゾーン)において有効に機能する。母親の意味づけによる効果が大きくなり, 関係展開の「鍵」となる。	T
第Ⅲ期	共有体験期	第Ⅱ期において学習した交信過程	母親への目的未言語発信。 受信において理解向上。伝達, 表現機能が顕著で, 交信過程が活発化。	T
第Ⅳ期	弁別不安期		母親との距離ゼロを求めるための, 或いは維持, 確保のための 目的未言語発信が増加。 Tゾーンにおける交信過程が増えて, 両者における心理的距離をちぢめ, 関係の成立における「質」と連なる。	T・V
第Ⅴ期	安 定 期		明確な未言語による要求行動の増加。 V, Aが質的に転換, 次第に成人言語へと移行する。	T V A

※ 信号行動系(A・V・T・)を総体としてまとめた概念である。

程はその時間の経過で決められるものではなく, 本人自身が交信過程の質を量的に貯えることによって結果的に一つひとつの段階を経ることになる。そこで, 発達助成者としての質が求められるということになる。人間関係の成立段階を経ていない場合には, 言語の歪みとしての, 見かけの言語の問題等が起こることになる。臨床過程において, 遅滞児の場合, 発達のベクトルの見方を見誤らないことが求められるのである。

Ⅱ. 対 象 児 : 研究期間内に検討資料とするもの

- お茶の水女子大学家政学部児童学科言語障害研究室を訪れた子どもたち
1972年～1976年まで 300余名
1972年～継続臨床 18名
- 白梅学園短期大学保育科研究室を訪れた子どもたち
1977年～1986年 30名

- 1978年～継続臨床 4名
3. 重症心身障害児施設収容児 1名
- 1973年 3週間 保育者としてかかわった子ども, Mちゃん
4. 家庭の乳幼児(年齢は研究期間の1992.3.31までを示している)
- 1) 1985年12月19日生 男, Kちゃん 0:0～7:3
ダウン症, 4:3から幼稚園
 - 2) 1987年12月11日生 男, Sちゃん 0:0～5:3
ダウン症児の弟
 - 3) 1988年4月29日生 女, Aちゃん 0:2～4:10
1:10前後から2:3ごろまで 母親の病気の為 maternal-deprivation を経験
 - 4) 1989年8月4日生 男, Yちゃん 0:2～3:6
ダウン症K児といとこの関係
 - 5) 1991年2月6日生 男, 0:0～2:2
Mちゃん。女児Aの弟
 - 6) 1989年11月3日生 男, Gちゃん 1:5～4:4
重症心身障害児(水痘症 半身マヒ)
 - 7) 1989年11月3日生 男, Dちゃん 1:5～4:4
6)の弟 双児

他に, 共同研究の保育園児^{31)～35)}の成果も含めて検討する。

なお, 1984年までの臨床資料については, 現在の発達・臨床論からみて, 改めて検討し直す資料として用いた。

Ⅲ 言語習得過程; 言語・発達の臨床

1. 第一期: コミュニケーション関係成立期

1) 人間関係の成立段階, 第一期模索期から第Ⅲ期共有体験期; コミュニケーションの基本原型の学習と交信の活発化の時期

周産期医学の進歩によって, 胎児¹⁾は母体内にある間に母親の声などに反応することが明らかにされてきた。妊娠中にトラブルがなく穏やかにすごせることは, 胎児にとって望ましいことは言うまでもない。母子関係は胎児期から始まっているということになる。出産という一大イベントをのり越え, 母子が共に新たな出会いをする。物理的には切り離されてから, 一個人と一個人とのコミュニケーションが始まる。本人の生物学的要因と人間関係の出会いから成長の一步が始まる。

成長の為のほとんどを保育者に依存している新生児や乳児にとって, 母親との接点は物理的に接触する, 授乳, オムツ替え等の介護を受ける時にある。触覚的信号行動系の発信・受信を感じ合う“瞬間”である。

① 事例 Sちゃん, 1987年12月11日生, 男。

胎児期は穏やかにすごしていた。兄(Kちゃん)の発達臨床のさまざまなかわり方としての歌や話などを胎内で大量に聴いている。安産。母親は2日めから歩行。よく泣き, よく飲み, よく眠る。

3 日め。「抱いたとき、すっとおさまるでしょうか」と母親からの出産報告TEL時に問う。あとでしまったと反省。「今はそういうことはない」との報告であった。模索期と言えよう。

5 日め。「泣いて、抱くとおさまるのがわかった」と母親が言う。母親のT信号行動系発信に対する受信である。コミュニケーションの応答である。すでに接触体験期であろうか。

6 日め。母親は台所にいる。Sちゃんは寝ている。母親がやってくるまでの2分ほどのできごと。

— 筆者の思い —	— 筆者の動き —	— Sちゃん —
あらあらどうしよう困ったわね		ウァー ウァー(A)と力強く泣く state 5.
	筆者が体に手をふれる(T)とスっとおさまっていく 感触が伝わる(T交信) 抱きあげる(T持続) 両手にスポッと入っている感じである	
あらよかったわ ホッとしながらも手の感触が感じられた あらあら…		ピタッと泣きやみ (5秒)静か state 3. (思い出したように) ウァー ウァー(A)
	「よしよし」(A)と言いながら 体をトントンと軽くたたく(T)	
		スっとおさまる state 3. 静かになる
	おさまりが手に感じられる (T交信)	

5 日めのエピソードが筆者にも感覚としてわかった。T交信が既にできている、ということである。T信号行動系によるやりとりで既に接触体験期にある、とみなせる。

6 日め(写真1)。母親に抱かれて安定。抱いている母親も安心していて、両者が安定。V信号行動系の方向はまだ不明確。0 mの育児で既に母親がT信号行動系による応答の感触を得ているので、両者の応答がよりスムーズに運んでいる。

寝ていた時に泣き始める(state 5)。筆者が手をSちゃんの寝ているかけぶとんの上においた(T)とたんにスっとしずまり(T応答)(2秒)、のちすぐ泣き始める。一秒に2回程度の頻度でトントンと少しはずみをつけるようにふとんの上からたたきつづけると、スーッとしずまる。もう少し早めのテンポでたたきつづけているとおさまっている。母親に「そろそろオッパイの時間かな」と問うと、「そうです」という。母親がくるまでの間(3分)軽くたたきつづける。静かにおさまっている。目をあけて相手を見ていなければ(state 3~2) T交信の相手が母親でなくてもよいようで、タイミングよく不快を静めてくれる人のかかわり方(交信)があればよい時期である、ということのようである。また目があいている。state 3~4の時でも、良いかかわり方であれば、おさまっている時期でもある。本人に一番わかりやすい信号行動系がT信号行動系ということになる。

30日め(写真2)。30cm離れている母親の目をとらえている。表Ⅱからみても、Sちゃんは6週に相当する。

1か月と7日(写真3)。祖母との間でもV信号行動系やりとり。表Ⅱの4か月に相当

Sちゃんの成長

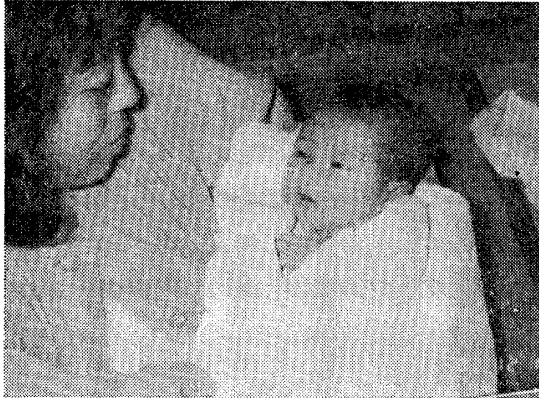


写真1. 1987年12月17日 (6日)
state 4. 母親に抱かれている。安定。
母子関係成立段階 第II期 接触体験期



写真2. 1988年1月11日 (30日)
state 4. 母親に抱かれている。視線は母親の目をしっかりとらえている。
母子関係成立段階 第II期 接触体験期



写真3. 1988年1月18日 (1か月と7日)
祖母に抱かれてあやされている。「ウー、ウー」という発声と微笑で応答。
母子関係成立段階 第III期 共有体験期



写真4. 1988年2月24日 (2か月と12日)
祖母に抱かれている。母親が声をかけると、ふりむいて母親をみつめてじっとみつめて「ウー、ウー」という。右手も動かす。細やかな表情表現 (V信号行動系) がうかがわれる。
母子関係成立段階 第III期 共有体験期

する内容も見出せる。

2か月と12日 (写真4)。Tゾーン、ゼロmで安定しながら、V・A信号行動系で交信。コミュニケーションのしくみが理解できおてり、既に習得した信号行動系を有効に活用している。

2) 事例 Kちゃん²¹⁾, 1985年12月19日生。男。21トリソミー, ダウン症候群

6日め (写真5)。哺乳力が弱いのでチューブで栄養摂取。模索期。発声はTゾーン内だと耳をそばだてれば聞きとれる。弱くて細い。持続一秒未満。発声の頻度は少ない。

信号行動系発信が弱い子どもの為、Tゾーン育児 (できるだけ抱いているかくっつけておく) を実施。T信号行動系発信によってKちゃんが快いと感じた反応を出してくれるようになることがねらいとなる。Kちゃんのダウン症の特性をみきわめた上で、細やかなかわりをする。栄養摂取を含めて健康保持に注意する。さく乳器で母乳をとって哺乳びんで授乳。吸う力は弱い。少しずつオッパイから吸えるようになったのは、1か月7日すぎからである。

表Ⅱ 乳児の知覚発達に関連する行動特徴 (スターンの記述を佐々が整理, 1984)

月 齢	乳児の活動	行 動 の 特 徴
出生・新生児	視 線	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 8 インチ (20cm) 離れたところの対象しか目の焦点を合わせることができない。オッパイを飲む位置では8インチむこうに母親の目がある ◦ 非常に反射的なものと思われる諸表情
	微 笑	
2 週間	微 笑	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 内的なものに起因する内因性の微笑, 反射的微笑
6 週目	視 線	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 視覚運動系の発達; 母親の目をじっとみる。大きく目をあけてみる
	微 笑	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 外界の諸事象により引き起される外因性の微笑, 社会的微笑
3ヶ月はじめ	視 線	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 視覚運動系の成熟 ◦ 視界は周囲8インチ四方に限られなく焦点距離は大人と同じくらいの広さの幅
	微 笑	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 道具的な行動となり, 他の人の反応を得るために微笑
3ヶ月末	視 線	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 大人と同じようにすばやく目を動かしてものを追いかけて視線を固定させたりすることが可能 ◦ 視線を向ける方向を運動的にコントロールすることが可能
	諸 表 情	<ul style="list-style-type: none"> ◦ 社会的道具行動として働き始め, 母子のやりとりにおいて調整の役割をもつ ◦ 不快の表情の系列は ①冷静な顔, ②しかめつら, ③まゆ毛がつく, ④ほほ骨のあたりがつり上がる, ⑤目がシバシバし始める, ⑥涙が溜まり, ⑦下唇がふるえ, ⑧口があくたびにしゃくる, ⑨口の両端が下がって, ⑩泣き顔になる ◦ 息のせきこみや泣き声は⑦～以下
4ヶ月	微 笑	<ul style="list-style-type: none"> ◦ ごく自然で協調された動作のもとに生じる。その他の諸表情も伴う ◦ たか笑いがみられる
～6ヶ月	微 笑 対象物との関係	<ul style="list-style-type: none"> ◦ たか笑いは簡単な触覚刺激で引き出される ◦ 手と目の協調が可能

1 か月 (写真6)。Kちゃんが顔を向けている方向に母親がいる。至近距離 (20cm) にいて顔を合わせると目が合う。応じる力は弱い。

Tゾーン育児をしながら, Kちゃんが見やすいような位置にいることを心がける。

1 か月と24日。下におろすと, 体をゴソゴソ動かす。いやみたい (よみとり) と祖母や母親が言う。母親自身は「抱っこはあまり好きではないが, この子が好きだから抱っこしている」と言う。T信号行動系の交信, 接触体験期とみなせる。向かい合わせの抱っこで20cm むこうにKちゃんの顔があるようにすると, 母親をしっかりとみつめる。1回5～7秒。みつめる回数が多くなる。V信号行動系による交信。向かい合わせに祖母が抱いているとき, 口をすぼめると, 口をすぼめることがある。

3 か月と18日 (写真7, 8)。発声 (A) は弱いが微笑 (V) と共に交信。共有体験期。母親に対する表情に豊かさがうかがわれる。母親はどのような場合でも子どもとかわる時はごく自然のうちにKちゃんに対して顔を近づける距離が20cm 以内くらいになっている。

Kちゃんの成長

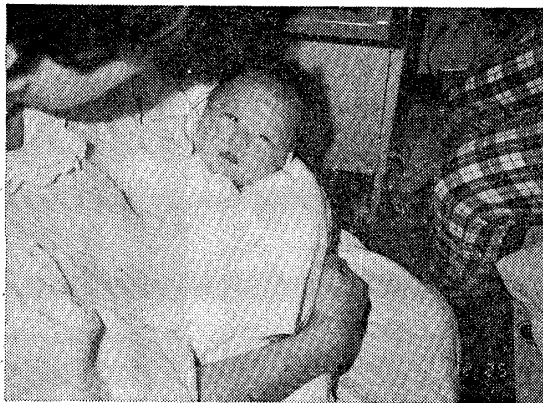


写真5. 1985年12月25日（6日）

state 3. 母親に抱かれている。哺乳力が弱いためチューブをつけている。

母子関係成立段階 第Ⅰ期 模索期



写真6. 1986年1月19日（1か月）

state 3. 母親の方向をみつめているが、みつめ方はやや弱い。

母子関係成立段階 第Ⅰ期 模索期



写真7. 1986年4月6日（3か月と18日）

祖母に抱かれてあやされている。祖母の笑みと合わせて弱い発声(A)で「アー」と微笑。しっかりと目をみつめている(V)。

母子関係成立段階 第Ⅲ期 共有体験期

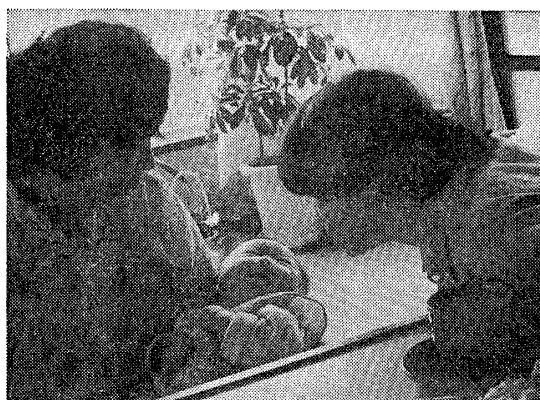


写真8. 1986年4月6日（3か月と18日）

写真7のあと、母親が近距離(30cm)から声をかける。顔を母親の方向にむけながら目をみつめて(V)，発声(A)しながら応答。表情の豊かさがうかがわれる。

母親と子どもの顔との距離は20cm以内

母子関係成立段階 第Ⅲ期 共有体験期

る。母親の側が無意識のうちにできるようになっていることで、Kちゃんの弱い発信行動でも交信が可能ということになっている。

3) 事例 Yちゃん 1989年8月4日生、男。

4か月。母親と向かい合わせになるように抱かれている。体をゴソゴソ動かしている。じっとしていない。「キー」というピッチの高い声をあげる。10秒程度の間にさらに声のピッチがあがる。母親は「どうしたの、どうしたの」と言いながら子どもの体をより自分の側とピッタリと寄せようとする。さらに「キー」というピッチの高い声を出す。10秒。母親はオッパイかな、オムツかなと状況の中でさぐろうとする。10分経過。なかなかおさまらない。模索期。

Yちゃんは、不快に感じた時には一息で「キー」というピッチの高い音を10秒近く、連続的に産生する。その間にさらにピッチの高い音になり持続する。自分の気持というものその音声に託して精一杯表現しているかのようなようだった。ただ余りにもその音の高さと

発声に持続力がある為に(耳につんざくように聞こえるし、聞き手の耳にその音が残るように感じられる)、くり返し産生されると母親がまいってしまうようになった。T信号行動系でおさめられない状態がつづいたことが、さらなる音声表出になったのかもしれない。ものへの関心、操作能力、運動面の発達はよいし、気嫌のよい時には、V信号行動系のやりとりや発声によるやりとりもできているものの、いったん気嫌をそこねることがあって「キー」と表出し始めると、月齢を重ねるごとにおさまりが悪くなった。その時の母親のいらだちとが重なるためか、悪循環になっていたようである。「キー」発声の時にひたすらギュッと抱いておさめるように、発声の強さはYちゃんの意志の強さととらえて、その強い力を認めること、そして子どもが抱きしめられて或いは抱かれておさめられる体験の積み重ねがあるような状態を求めてやってみるようにと助言した。T交信へのきっかけづくりである。1歳2か月で接触体験期、1歳3か月で共有体験期となった。抱いていてもなかなかおさまらない、ということは、不定型¹⁹⁾が続いていた、ということになる。

4) 事例 保育園児(H組の子どもたち)^{30)~35)}

都内A保育園の0歳児。1988年4月1日の保育者と子どもの交信過程の内容は表Ⅲである。1年間の子どもの人関係の様相の推移は表Ⅳである。接触体験期から共有体験期になるまでにかなりの時間を要している。集団故に一人ひとりに丁寧なかかわり方としての質及び量が確保しにくいということが考えられることと、入所時まで人関係の基盤を経ないことが要因であろう。

5) 事例 言語発達遅滞児, Mちゃん²⁸⁾。

6歳3か月時に初めて出会う。Mちゃんとのかかわりについて、接近過程と人関係の成立段階を表Ⅴで示した。接近過程の類型の漸接型は接触するまでの時間の長さを示している。接触体験は痛みを伴うもので、この時期はただ受けとめるのに精一杯の状態であった。接触体験の人として母親より筆者を選んだことは、それだけ母親との間柄が固着化していたことだと考えられた。母親からの目的接近¹⁸⁾、及び、子どもからの目的接近¹⁸⁾があったものの、その目的が達成されれば、人そのものをためすというような「場としての人」としては用いてはいない。Mちゃん自身が接触体験期に入るとみなされる、「人(この場合は筆者)」を位置づけるのに筆者とでも4年半もかかっている。彼の暦年齢10歳9か月であった。体重40kg、身長150cmの頃で筆者が受けとめられる限界の頃であった。時間のかかり方は遠方定置型にある子ども故であったと思われる。

6) 事例 重症発達遅滞児, Mちゃん²⁶⁾。

保育者としてかかわった時のMちゃんは、14歳7か月。

最初の出会として、研究開始12日前の昭和48年7月11日にのべ3時間にわたって事前観察を行った。その時の子どもの状態は次のようなものであった。

- ・場所：都内重症心身障害児施設の保育室
- ・男12名、女21名の園児がいる広い部屋で、中に3人の指導員、保母が活動している。

観察の観点として特に、自己活動(S)、周囲への反応(R)、運動(M)、発声(V)に注意し、その他全体的特徴を把握しようとした。

(1) 前半(12:30~1:00) 継続記録

- ① 膝立ちを(M)し、両腕を腹部の前に組んで、頭を左右に振って(S・M)いる。1秒1回ぐらいのリズムがあるようにみえる。眼球をキョロキョロ左右に動かし、回りを見ているように見える。眼球の動きと首ふりとのタイミングは合っているようには感じられない。5分くらい膝歩きの姿勢のままで10mほど移動(M)する。
- ② 体全体を折り曲げてうずくまる(S・M)姿勢になり、2~3分じっとしている。回りに

表Ⅲ H組の子どもたちとの交信と子どものタイプ (梅田, 1989)

子ども	入所時 の月令	運動能力	保育者と子どもとの交信過程	信号行動系	表情図	子どもの タイプ
A	11 ヶ月半	つたい歩 き	他の子どもが泣き出す(A)。◎も泣き出す(V.A)。◎は◎に近づき(V)抱 きあける(T)。◎は泣き続ける(T)。◎は受け入れ時から泣いている (V.A)。◎は◎を抱っこする(T)。◎は泣き止む(T.V.A)。抱っこから降ろ す(T)。◎が泣く(A)。◎は◎を抱っこしたり(T)おんぶをしながら続ける(T)。	T. 抱っここの維持要求。おさまりは悪い。 V. 眉間にしわを寄せる。目を細めている。 A. 泣く。		不定型
B	10 ヶ月と 14日	つたい歩 き	◎はおすわりをしながら泣き出す(V)。◎は今にも泣き出しそうなる表情をしている (V)。◎はまわりや◎の顔を見る(V)。他の子どもが泣き出す。◎は泣く (V.A)。◎は◎に近づき(V)抱っこをする(T)。◎は泣いていて(A)。表情 は目頭に力を入れ目を細めている。口角を下げて開いている(V)。10 分ほどするとおさまる(V.A)。表情は目頭にやや力を入れ目を少し細 め口角を少し下げている。◎を◎の横におろす(V)。泣き出す(V.A)。	T. 抱っこでのおさまりは悪い。 V. 目頭にやや力を入れていて。目をやや細 めている。口角を下げて開いている。 A. 泣く。		不定型
C	9 ヶ月と 10日	つたい歩 き	◎は泣いている◎を抱っこで受け入れられる(T)。◎は目をつぶり眉間にしわ を寄せ、口角を下げて口をやや開き(V)泣いている(A)。◎は泣きながらそっ くり返る(T.V.A)。◎は◎を抱っこで支えきれなくなる。おんぶをすする(T)。 ◎のぐずり方がおさまってきた(T.V.A)。おんぶをすしたまま◎が坐ろうとす る(T)。◎は強く泣き出す(T.V.A)。◎は立ったままおんぶを続ける(T)。 まわりの子どもの泣き声がする(A)。泣き出す(T.V.A)。ということ繰り返 返す。	T. 抱っこをすするとそっくり返る。おんぶで のおさまりは悪い。 V. 目をつぶる。眉間にしわを寄せる。口角 を下げて開いている。口をやや開いている。 A. 泣く。		回避型
D	6 ヶ月と 20日	うつ伏せ 背後に座 布団程度 の支えが あればお すわりが できる	◎はすわっている(V)。ぐずり声を出す(V.A)。指しやぶりをして目をつ ぶりかけている(V)。◎は◎が眠いのだと思ひ◎は◎に近づき(V)抱っこを して(T)ベッドに寝かせろ。(◎は◎に近づき(V)抱っこをしながら、壁の方を 向く(V)。◎は足をバタバタさせ90度回転する(V)。◎は◎の体を軽くトント ンとたたたく(T)。◎のぐずり方はおさまらない(T)。タオルで枕を作り、タ オルが顔にかかるとかのようにする。◎はおさまる(V)。	T. 体を軽くたたかれないとおさまらない。 V. 目線は斜め下。目をつぶりかけている。 A. ぐずり声？		回避型
E	6 ヶ月と 18日	うつ伏せ おすわり はできな い	◎は◎を抱っこで受け入れられる。◎は目をまん丸に見開く(V)。口をポカン と開く(V)。◎は◎の顔をじつと見る(V)。◎は◎を抱きあげ、向かい合いの抱 っこをする(T)。◎は泣き止む(T.V.A)。◎は◎を降ろそうとする(T)。◎ は泣き出す(T.V.A)抱っこする(T)。泣き止む(T.V.A)。	T. 抱っこでおさまる。 V. 目をまん丸に見開く。口を力なく開けて いる。 A. 泣く。		促進型
F	6 ヶ月と 14日	うつ伏せ おすわり はできな い	他の子どもが泣き出す(A)。◎は目頭に力を入れ口を閉じ口角を下げる (V)。30秒ほどして◎が泣き出す(V.A)。◎が◎を抱っこして左右に揺する (T)。背中をトントンと軽くたたたく(T)。言葉をかける(A)。◎は泣いてい る(A)。◎は◎にミルクを飲ませる。◎は強く泣き出す(T.V.A)。◎は抱か れている(T)。◎は◎を抱っこしたまま座れる(T.V)。◎は激しく泣き出す (T.V.A)。◎は立ったまま抱っこを続ける(T)。戸外に連れてゆく(T.V)。 泣き止む(T.V.A)。部屋に入ろうとすると◎は再び泣き出す(T.V.A)。	T. 抱っここの維持要求。 V. 目頭に力を入れていて。口を閉じ口角を 下げて開いている。 A. 泣き声。		不定型
G	11 ヶ月13 日と	つたい歩 き	◎はおすわりをしながら泣き出す(V)。泣き出す(V.A)。◎は子どもを抱っこする (T)。◎の泣き方が次第におさまる(T.V.A)。泣き出す(T.V.A)。◎ は◎をおんぶする(T)。泣き止む(T.V.A)。◎は◎に寄りかかって眠る (T.V)。	T. おんぶでおさまる。 V. 目頭に力を入れていて。口角を下げてい る。口を閉じている。 A. 泣き声。		促進型

◎：保育者，◎：子ども，T：触覚的信号行動，V：視覚的信号行動，A：聴覚的信号行動

表Ⅳ H組の子どものたちの人間関係の様相の推移 (梅田, 1989)

子ども	4月	7月	10月	1月	3月
A	抱っこでのおさまりが悪い。	抱っこでのおさまる。表情、しぐさ、声で誘導。	さすとおさまる。	表情で誘導。 肩に寄りかかる	接近、接触する。 正面から(保)に抱きつく。
B	抱っこでのおさまりが悪い。	近距離で抱きつく。 抱っこでのおさまる。		近距離で接近、(保)の体に触れる、叩く。	近距離で困ると(保)に接近。 さすとおさまる。
C	抱っこをすするとそっくり返る。 オンプでのおさまりが悪い。	近距離で抱きつく。 接近行動。	後追い。	(保)と表情でのやりとりをする。	(保)の仕草をそっくりまねる。 (保)を視線だけで誘導。
D	体を軽くたたかたかたでもおさまらない。	抱っこ維持要求。	抱っこでおさまる。 抱っこからおそろすとするとしかみつく。	近距離で接近する。	(保)から(保)への目の後に(保)からの抱っこ維持要求。
E	抱っこでのおさまる。	抱くとおさまる。 しがみつく。	さすとおさまる。	後方より(保)にとびつく。	(保)後から (保)に手をさしのべる。
F	抱っこ維持要求。	さわる、抱くとおさまる。	抱っこでおさまる。 抱くと(保)に寄りかかる。	接近してくっついてくる。	人見知りのため(保)に接近。 人がいると(保)にしがみついている。
G	おんぶでおさまる。	5月退所			
H	7月入所	抱くとおさまる。 抱くと(保)に寄りかかる。	接近し、(保)に両手をさしのべる。指をさし、そのことについて(保)とやりとりをする。	接近し、抱きつく。 後追いすることもある。	接近し、(保)に両手をさしのべる。
I			1月入所	抱くとおさまる。	抱っこの要求を声、表情、しぐさで表す。
J				2月入所	近距離で接近し、(保)にすりよりつかまっている。

子どものタイプ



人間関係成立段階



表 V Mちゃんの接近過程と人間関係の成立段階 (佐々, 1991)

段 階	M ちゃん の よ う す		M ちゃん と の か か わ り	時 間 的 経 過	接近過程の類型	人間関係の成立段階
	M ちゃん の よ う す	M ちゃん と の か か わ り				
1	その場にたちつくす	体がこわばり、目を大きく見開く。その場に立ちつくす。目を見開き、まばたきをしない。	一瞬、ドキッとしながらおどろかせないように配慮する。	初めての出会い 初めての訪問		I 模 索 期
2	私から離れる、後向きの姿勢	私から8mほど離れた場に後向きにすわる、時々、体の向きを変え、私の方をチラッと見る。	前向きの姿勢にドキドキしながら怒しくなる。 私も観察しやすくなる。		遠方定置型	
3	私を遠くからみつめる、前向きの姿勢	私の近く(2~3m)まで寄ってくる。 私が目を見つめると走り去り、10mほど離れた場に居る、目が合う、伏せる。	こういう体勢で接するといいいのか、とまどいながらも、子どもの反応(信号行動)を手がかりとしながら、かかわっている。	2~3か月後	"	
4	少しずつ近づいてくる、私を観察する	3~4mのところまで近づくと、イスのまわりをグルグルまわり、チラチラッと見たりする。「~は?」と問いかけることが増えてくる。	子どもからの情報量が増えてくることで、かわり方がふえる。私の動き方をきちんと意識して内容をおさえながらかわるようになる。	1年半	振 幅 型	
5	近距離(1~2m)に居て、私を観察する、距離が近づき始める	「これ何?」と本の中のものを指して聞いたり、TVや体験したことの中でわからないこと、おもしろかったことなどについてくり返し話しかけてくる。	くり返しの反応を私も楽しめるようになってくる。Mちゃんの表情など細かなことがわかり始める。	2年目	"	
6	私を周辺から探索する	私のすわっているイスをさわったり、私の持ち物を取り出してきてさわると、私の方を見る、話をする。	距離的に近いところと子どもとのさまざまな情報を得られて嬉しくなる。	3年目	"	II 接 触 体 験 期
7	私を十分に探索する	たたく、ける、かむ、ひつかく、ひっぱる、押すなど力まかせにする。 力は弱まり、私の反応を確認する。	初めての時に、少々びっくりにしながらその接触体験を、大切にしようと思う。毎回、子どもが守れるかどうか、出会うまでが不安。会うとやりとりのし方がわかる。守れてよかったと安心する。	4年半め (→1か月続く) (→1か月半続く)	"	
8	私を受けとめる	私の言うことを聞きとめる。しがみつくと、くっつきまわる。私との距離は0~1m以内。	ゆとりをもってやりとりができる。Mちゃんのことがよくわかるようになる。		密 接 型	III 共有体験期
9	私を自分に引き寄せる、体験を共有させる	本のある場につれて行き、本の質問をする、外行動について行かせる、その場で見たこと、体験したことを話し、私の話を聞きとめる。	Mちゃんの内面の世界へさそわれていく。心対話をしているような気持ちになる。やりとり行動がスムーズになる。気分的にはとても楽になり、やりとりを楽しむようになる。		"	IV 非別不安期
10	私から他の人へのひろがり		Mちゃんの行動の全てが嬉しい。共に成長していきけることを実感する。			V 安 定 期

子どもたちがいるが、余り気づいていない(R)様子。

- ③ また体を起こして、膝立ちになり、あたりを首を左右に振り(S)ながら見ている(R)。1分ほどたって、その場に座り、片手の指の腹先でトントンと床をたたいたり(M)、指を前後に動かしたりする(S・M)。
- ④ 少し座ったまま、尻で床をいざるようにしながら動く(M)。首を左右に振りながら、体を左右にゆっくりとゆする(S・M)。頭を振りながら、だんだんと床に近づけていく(M)。眼球はキョロキョロと左右に動いている(S)。うずくまるようになっこうになっている。以上約30分経過。

(2) 後半(1:00~2:00)の継時記録

- ⑤ 膝立ち移動をし始める(M)。首を左右に振り(S・M)、左腕は上下ななめに大振り(M)しながら、右手を口にもっていきしゃぶる。移動するときは、体を左右にゆすりながら進む(M)。顔面は無表情に近い。顔はやや下向きかげん。
自分の行きたい場所があるのか、ある場所に行くと座る。(場所が決まっているわけではない様子) 10mほど移動。5分経過。
 - ⑥ 左手の指しゃぶり(S)をする。床から10cm ところまで顔をつけに行く(M)。そばに子どもが来たのに気づいたのか(R) ゆっくりと起き上がる。元の座った姿勢で首を左右に振り、両手はおなかあたりに組む。10分経過。
 - ⑦ 両手指をしゃぶる(S)。左膝を立て、その足と尻を使って少し回転しながらいざる(M)。左手はブランブラン(S・M)と力をこめて、空を切るようにする。2~3分うずくまる。(S)。
 - ⑧ 起き上がり、両唇を使って破裂性のパツという音(V)を出す。眼球はキョロキョロと左右に動いている。5分経過。
 - ⑨ 膝で方向転換(M)し、観察者からは子どもの後姿。子どもの顔の先の方向に窓が見える。左手は親指をなめ(S)、右手で自分の足をさわっている(M)。
 - ⑩ より窓側に尻でいざりながら行き(M)外の方を見る。外との距離は、5~7mある。
 - ⑪ 膝立ちして窓の方へ寄って行く。外を見ている。少し見て、また方向転換し、一回転して(M)元の場へ。ぐるっと回ったことになる。10mほど移動したようである。(観察者と向かい合う。)右人さし指をしゃぶっている(S)。
 - ⑫ 時々舌を出している(S)。そのあと口の中で舌を回転させているかのように動かしている(S)。眼球はキョロキョロと左右に動かし、口はモグモグしている。(S)。膝立ちで移動し、みんなのいるところから離れ、壁に向い合う。座る。じっと壁の方を見ている。手は自分のおなかのところに組んでいる。そのままの姿勢で10分ほどじっとしている。
 - ⑬ その間時々頭を床にくっつける(S・M)。床に頭をぶつつけるとき、ゴツンゴツンという軽い音がする。ベッタリと頭を床にくっつける。少し顔を横に向け、1分ほどして起き上がる。
 - ⑭ 舌を回転させている間(S)に、ブーブーという吸気性の音(V)を出す。舌を吸っているときに出ている音のようである。左手はかなり自由に動き(M)、右手に触れたり、床や足などをさわったりしている。
 - ⑮ 両手を胸あたりに組み、左足で膝立ちして(M)、キョロキョロと回りを見る(R)。ビュッビュッブーブーという音を出している(V)。右手指しゃぶりのとき、「ウーウー」という声(V)を出している。
 - ⑯ 床にうつぶせになり(S・M)、頭を床につけ、両足はカエル足(M・S)のような形になる。両腕は組み、その上に自分の顎をのせている。その姿勢で体全体を1秒1回ぐらいのリズムで前後にリズムカルにゆする(S)。目は床を見ているのかうつむきかげんである。
 - ⑰ たいこの音がかなり激しくしていたが、その音がし始めても止まっても、その音に対して無表情。慣れているのか。
- (3) 観察者(筆者)の働きかけに対する反応
- ⑱ 観察者がそばに行き、自分の視線を子どもの視線に合わせようとするが、合わない(R)。反応がないようなので、回りの人への興味や関心があるのかないのかわからない。無関心のようである。(R)。
 - ⑲ 胸のあたりをゆっくりさすってみると、観察者にもたれかかり(M)、うずくまるようになる。耳もとで息を吹きかけたり、顔をやさしくなでたり、ささやき声で語りかけたりなどす

ると、少しウットリとした表情になる。

- ⑳ ささやき声などの慣れていない音に対しても、聞いているような感じにもとれるが、はっきりとした反応は示さない(R)。

当時の記録のまとめは「周りの状況や人に対して関心が薄いと思われるものの、初めて出会う人とでも、触れ会いを通して通じ合える可能性がある」となっている。改めて人間関係を評価すると、かかわり方のタイプは促進型で、Tゾーンに居れば既に接触体験期にあるということである。

評価は多少ズレてはいたが、保育者として子どもの真正面に位置し、顔との距離を20cm程度の至近距離にしていた。

初日(7月23日 17時15分)

保育者(筆者)	子どものようす
向かい合って座って腹と背を同時にくすぐる	笑う ニヤッ
行くぞ行くぞ ポンという	保育者に背中からもたれかかる
「タタ タンタンタン」と声をかけながら肩をたたく	ニヤッ 笑う
「おんぶしようよ、おんぶおいで」	膝立ち
子どもに背を向けてすぐ前までいく	
だっこして向きを変える	両手をにぎってなかなか離れない 表情はやや固い
「おいで」おんぶをする 上半身がたつ	背中に上半身がたつようになる
態勢を感じながらおんぶして歩く	
おんぶしながらピョンピョンとぶ	アハッと声を出して笑う
「チョン チョンパー」	うれしそうな顔をして声を出す
「ぐるぐる」と言いながらおんぶしながら回る	うれしい声
「ピョンピョン」(変化をつける)	高い声を出して笑う

この時点で既に共有体験期となっている。

19日め(8月11日)

おんぶをすると、保育者(筆者)の顔の方に顔を向ける。背中でのおぶさり方も上手になる。保育者に体をまかせるようになる。

終了時3週間めにはほとんど一日中保育者にくっついており、身をまかせるようしている。子どもの方からじっとみつめることがある。50cmほどの距離であればすり寄ってくる。保育者の声を聞いてニヤッと笑う、あやすと声を出して笑う、など、共有体験期での交信が活発になってきている。

距離として近くに居て質と量のかかわり方をすることによって、重症児も人間関係が育まれるという実践例である。

2. 共有体験期までにみる人間関係の成立過程

信号行動系での交信過程をみると、信号行動系発信→さわる、抱く、で子どもがおさまる、ということは、子ども自身のT信号行動系受信←及び発信→を表わしていると言えよう。

共有体験期までの経過をみると、A、V信号行動系の発信・受信による交信過程の前に、T信号行動系による交信がある。さわれるとおさまる、ということがとりわけ意義

深い。ヒト本来の子育てにおいては、皮膚接触による交信が両者の出発点であった。たとえばサインの弱い子どもでも、皮膚を通して伝わるサインは、感覚に訴えるものだけに意味づけさえしていけば交信過程がつづく。保育者によって、「静かな、こちよい状態」を確保させてもらっていると感じられることは、子どもにとっては大変豊かな時間である。

保育者からのT信号行動系発信でおさまることは、接触体験期への「鍵」であり、さらに両者のT信号行動系の交信は、距離ゼロm (Tゾーン) が確保されているだけに、交信が持続する。両者にとってこちよい体験である。また、保育者が子どもにとって、見やすい位置を考えて動く程に、子どもにとっては保育者を知覚認知しやすくなることでもある。このことは、子どもにV信号行動系発信・受信の契期となる。

T信号行動系による交信過程は、コミュニケーションの最も原初的なものであり、これこそが、キャッチボールの原型と言えよう。

距離ゼロ内における交信過程なしに、いわゆるボールによるやりとりは成立し得ないと言っても過言ではないであろう。山田³⁶⁾の言うボールの「やりもらい」は距離があることが前提であった。実物のボールはそうであろうが、コミュニケーションのボールは、信号行動系でみるように距離ゼロmから可能である。そのやりとりは、保育者からのT信号行動系発信によっておさまられる、ということであろう。Tゾーンにおける交信は同時に、V・A信号行動系が相手にとって受けとめやすいということでもある。先の事例Kちゃんが育ったのは、Tゾーン内交信の質を考えたからに他ならない。

どのような人からの信号行動系発信も受けとめられ、やりとりができる状態が子どもにとっての第Ⅲ期共有体験期である。それは、このようなT信号行動系による応答、即ちコミュニケーションの基本原型があつてこそであり、これが、のちの人間(母子)関係の成立段階を育み、その上に、他のV・A信号行動系による、いわゆるボールのやりとりとなる。一般にいう「ことば」の前段階にはこのようにコミュニケーション過程が必須条件となる。

3. 共有体験期までの保育者のかかわり方

遅滞児の場合には、接近誘導法から接点をつくることにある。接触体験があれば、その接点でのやりとりを十分に行なうことにある。日常の育児・介護などがその「時」と「場」となる。乳児や重症児や障害児の場合、その「時」と「場」を十分にゆったりとしながら交信をくり返すことで機能していくと思われる。模索期には抱きしめて²⁹⁾、そこでゆったり(質)と過ごすことを確保し(量)、子どもが接触していることでこちよく感じるようになれば(快)、子どもからのサイン(信号行動系)を受けとめて細やかなやりとりになる。共有体験期には、いわゆる、あやし活動²⁷⁾が生かせる時期である。どちらかがきっかけでも、互いに楽しませることが可能となる。しかし、かかわる場合は、子どもの状態を常にみきわめながらすることである。

4. 共有体験期までの人間関係の歪みと発達臨床

接触することでおさまらないとか、回避する、ということが「歪み」である。「歪み」をそのままにするのではなくて、やり方を考えることになる。小さい子どもであれば、じっと抱いていれば、ひたすら抱いていれば、そのこちよさもおのずと伝わっていくもの

である。スッポリと包みこむようにすると、回避やおさまりにくさも変化するものと思われる。接触時の声や泣き声は耳に響くだけにむつかしいが、コミュニケーションの原型を今もとうとするきっかけづくりの大事な「時」を過ごしているととらえて、何とかその音声にとらわれない方策を見出して実践することである。

事例としてあげた子どもたちは、さまざまな発達の様相を示していたが、その間柄を育む過程上の様相には共通の道筋があった。そのたどり方の違いは、その子どものそれまでの育ち方とその後の人間関係の育み方によるものであると考えられた。生物個体としてのその子どもの特徴は、どういう状態であっても、人間関係のかかわり方に変わりがないことを明確にしてきたということになる。子どもたちは、コミュニケーション関係の原型の学習を基盤に、さらに多くの事柄を吸収して、未言語から有意味語への経過を亘っていくことになる。

有意味語までの過程についてはⅡで述べることにする。

参 考 文 献

1. T. バーニー, 小林 登, (1988), 胎児は見ている, 祥伝社
2. J. ボウルビイ, 黒田実郎訳 (1975), 母子関係Ⅰ 愛着行動, 岩崎学術出版社
3. J. S. ブルーナー, 寺田 晃, 本郷一夫訳 (1989), 乳幼児の話しことば, コミュニケーションの学習, 新曜社
4. 伊藤克敏 (1990), こどものことば——習得と創造, 勁草書房
5. 川上清文 (1989), 乳児期の対人関係, 川島書店
6. 前川喜平, 三宅和夫編 (1988), 発達検査と発達援助, ミネルヴァ書房
7. 松村康平 (1979), 児童における人間の探求, 光生館
8. 文部省 (1972), 言語障害児教育の手びき, 東山書房
9. A. モンターギュ, 佐藤信行, 佐藤方代訳 (1980), タッチング, 平凡社
10. 小此木啓吾, 渡辺久子編 (1989), 乳幼児精神医学への招待, ミネルヴァ書房
11. 野地潤家 (1976), 幼児期の言語生活の実態Ⅰ, 文化評論出版
12. 佐々加代子 (1983), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究Ⅰ 言語発達に関するメカニズムの基礎理論の検討, 白梅学園短期大学 紀要第19号, pp. 41—68
13. 佐々加代子 (1984), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究Ⅱ 言語発達の基礎的要因の検討, 白梅学園短期大学 紀要第20号, pp. 53—71
14. 佐々加代子 (1985), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究Ⅲ 言語発達における母子関係の発達段階と信号系の検討, 白梅学園短期大学 紀要第21号, pp. 29—45
15. 佐々加代子, 堤由起子 (1985), 保育におけるコミュニケーション関係の成立Ⅰ, Ⅱ 日本保育学会第38回大会発表論文集, pp. 438—441
16. 佐々加代子 (1986), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究Ⅳ 母子関係における信号系と言語発達の関連, 白梅学園短期大学 紀要第22号, pp. 55—69
17. 佐々加代子 (1987), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究Ⅴ 言語発達と社会化の関連, 白梅学園短期大学 紀要第23号, pp. 73—84
18. 佐々加代子 (1988), 乳幼児の言語発達に関する臨床的研究Ⅵ コミュニケーション関係における阻害要因の検討, 白梅学園短期大学 紀要第24号, pp. 47—61
19. 佐々加代子, 梅田裕子, 堤由起子, 中村晃子 (1989), 保育における人間関係の展開——子どもとのかかわり——, 白梅学園短期大学 紀要第25号, pp. 27—34
20. 佐々加代子 (1989), 保育者養成における言語教育Ⅵ——質的転換をめざして——, 全国保母養成協議会第28回研究大会発表論文集, pp. 61—62

42 白梅学園短期大学紀要 第27号 (1991)

21. 佐々加代子 (1989), ダウン症K児の言語発達過程——0～40——か月, 日本特殊教育学会第27回大会発表論文集, pp. 414—415
22. 佐々加代子, 梅田裕子, 中村晃子 (1990), 保育における人間関係の展開 II——展開過程の条件——, 白梅学園短期大学 紀要第26号, pp. 47—67
23. 佐々加代子 (1990), 保育者養成における“言語”教育 VII 豊かな言語表現をめざして (1)話しことば, 全国保母養成協議会第29回研究大会発表論文集, pp. 76—77
24. 佐々加代子 (1991), 言語障害, 鈴木健治編, 障害児の育て方 6章, ミネルヴァ書房 近刊
25. D. スターン, 岡村佳子訳 (1979), 母子関係の出発——誕生から180日——, サイエンス社
26. 田口恒夫, 佐々加代子 (1973), 重症発達遅滞児の治療的保育の実践研究, 読売光と愛のプレゼント研究助成金による報告書
27. 田口恒夫編 (1974), 言語発達の臨床, 第一集, 光生館
28. 田口恒夫編 (1976), 言語発達の臨床, 第二集, 光生館
29. ニコティンバーゲン, エリザベス・A. テインバーゲン, 田口恒夫訳 (1987), 改訂自閉症・治癒への道——文明社会への動物行動学的アプローチ, 新書館
30. 堤由起子, 梅田裕子, 佐々加代子 (1987), 保育におけるコミュニケーション関係の成立 III, IV, 日本保育学会第39回大会発表論文集, pp. 440—443
31. 堤由起子, 梅田裕子, 佐々加代子 (1987), 保育におけるコミュニケーション関係の成立 V (1)～(2), 日本保育学会第40回大会発表論文集, pp. 106—109
32. 堤由起子, 梅田裕子, 佐々加代子 (1988), 保育におけるコミュニケーション関係の成立 VI, VII, 日本保育学会第41回大会発表論文集, pp. 90—93
33. 梅田裕子, 堤由起子 (1989), 保育における人間関係の成立と展開——0歳児保育からの検討——, 第20回保育研究大会発表資料, 東京都公立保育園研究会, pp. 177—192
34. 梅田裕子, 中村晃子, 佐々加代子他 (1989), 0歳児保育における人間関係の展開, 日本保育学会第42回大会発表論文集, pp. 586—587
35. 梅田裕子, 中村晃子, 佐々加代子 (1990), 0歳児保育における人間関係の展開 II, 日本保育学会第43回大会発表論文集, pp. 206—207
36. 山田洋子 (1987), ことばの前のことば ことばが生まれる道すじ 1, 新曜社

さっさ かよこ (児童学)